結要三

イ13
914
2

甲陽軍鑑結要本三巻

一　有踏心之人六箇条之事

一　右六者指子不足之批判三箇條之叓

一　右有踏心之人を見知二服九箇条之事

大正十五年 花房仙太郎氏寄贈

イ 13
914
2

甲陽軍鑑末書結要本　三之巻

○有踊るゝ人ハ六者六箇条あり

第一 静に生付人　第二 早く生付人

第三 重く生付人　第四 恒く生付人

第五 和らく生付人　第六ハ強く生付人

一 静かなる心の人ハ其上人ハ次第々々の時我まゝ
下より居て秘義之道具を泉水試を水た
も桶なとへ下人先早々入させ其上能々奥
とれのくる人も泉水を水たる桶を柄杓を

かりしめまへ不意にて周章しくに心を失ひ
浅く浮なり

二ツ 大事犯心の人ハ卑犯を見れハまへ不意と静なる
よ犯とて 大火るハいよ〳〵大きなるへとかし
塚のおそのさとへ 消毒する時者まりて円
此下知仕合ハ大火事にもぬて是ハ恐れまりて
ありし犯しもかしてをやに事を仕役是一
心のそら升る所なる所 大地震の時一入を
風くあるハ一旦職し 相承人と居るべき事

氣のたまし職に刀照してをぬき者よし
具静するよ犯とて 少難くらしてきら
能くおハあらとちらるとふぞすれハてやぞび
ちらへ乱て行しかとらまとくよ仕役也
や犯心の人ハ業や

三ツ 重犯人ハ大男ハ不及申たとへハ一再人下人まで
まかへし行義をこゝろす物云る詞のさま
なく周章なる使計らて志をいんきんなら
て心さまかしくすく落着て我ゝよくせんべく

志るゝ地をすまへ下に住りあぶなげなく
万事を分別する人ハ越度もあるまじや

四　軽犯人ハ先して心をよく軽き所を摑まへ小刀者の袴をそかしうらあるとむていくと為たる人ハ庭前をあるく様子を見しかるべくと仕人毎に気遣いんきんとおまてに立まれ云す色さのさ去りになくそして心より犯反理に御様仕合か落くして悪事をハ何様しもあまり行して御中敵城を見いきとなるよへつき

それあつくミの犯て悪名になる所をハ人にい様を結句か落犯り而重く仕れき也軽き人ハ必をまり重犯人ハ必怪き仰をもし人に勝出て去んぞう去さいぬ依心より犯下に様子差るまじや

五　孫を犯人ハ大細事に抱を留而様に仕秋男をようくみん升そ見とてに人をまに抱有る成戸出し或そわざをして人をまに住りもかくらん人にへられていかんとひっゆるんとを摑まへ一下に仕跡先を守を見して其様子見人へるうし御乃表

氷のうすきをふむごとくにいたすへきとの事也
さゝ仕れと心よろしからず悪を極めても此や
六ヶ敷人ハかゝる年ゝ月ゝ日ゝ心ニ一かたを
ゆんさゝして思ふ之何事によらずてに肯定に
行当る事なく織よみころしなく指揮仕
ることを云如何成ハ心より一所へ趣を極めて思
東童子の如くなる所へ之是をまくこと
我か不及るを利に至る大きに相補しかく
必地いふべきものや

○右六ヶ者格子品ゝ格ゝ批判三箇条とすへし

一 此六ヶ志心ニ如まへ仁の為ニ生涯に人ハ未練の
人一人もなし皆武道の手柄を立る所存也

一 武道の手柄仕れはこそ其格なるや

一 之格くハ四つをくちおしくおもひまして武道の
たつしハ知行格下役まて主に仕を如申者
家中にて能武士ハ胸を据手柄仕者也
一人文雅歌を以てあんとの能筋を立
尤まりの能よく持りんとて能武士ニ相手ゝ手柄

仕着一人付足ハ幼少の時分より一かどの伯父政ハいとこ
抔にかゝりて武具弓具なとにめをかけて其沢山
思ひハ十七八歳まて右の親類より竹添小迫合
大合戦によりて敵をうちとるき刀脇指の拵よく合
子のあまた付たるを討れ玉ふきせとるに行の
ことくに九歳より内まて二三度も仕人を
むしさふらひ働計仕人ハ十人の中に九人まて此の悪
死ぬる事や是をむさふらひ武士と申也
此人ハ利發利口まて指をさす事すくまたなし

道の事も地あまりハ利根とハ申かたし悪人や
相又利根清教の人ハ心のうちに地よ我か祖父
親かくれなき武篇者の末子孫なり其代の
名をよふことを専一にし是を嗜しハ正しき武ニ而れ
なり是吉事をもつはらとして去年二月に武道とかせ
き小せりと合大人の戦にぬきんてゝ手柄をとる仕
申し朝暮心かけ手柄者の能武士一人能中
まきれて能武士一人ハ右のことく先祖の手柄を
存してまれなれよりまして名をとるにてこそ親を

うぢかしゝ相にゝるとしいうそまんとて志小迫人天
人戯にめきあるゝ事柄の心のけにさうもく武士は
よそとへとくねらて古えの武篇かたれの人も
せんさくして武略智略謀ハ針案け三段の
軍法を胸よりも施し武士をけてはいたし矢の
知識とハ作件の人武篇者と右有踊心
い者のせみすきそ示これ人よりあるゝやめ件
附 古語曰使智使勇使貪使愚心ところとこ
まてしらんかと

右有踊心といふ人を見知ル三段九箇條を云也

○一段目　洗心

一　人をよく見んと思ふものハ我か心を曲まく
すなをにしてめけぬハ大勇小勇たよ正道ふたる
しくよそ武士なる是れハ人をうけすまんやと
なるくまつり我が身心気よく液清して正路に心を
持なし毛頭もくもりなく思案工夫の分別
仕るやうに洗心して始結なれたち洗心を始
要なり

二ニ

我ハ心静なるときハ死ノ重キ怪キ神ト死トさく
きハけしからぬの人には又我ハ大肴て不礼なる事を
くらりていんきんなるハ正欲して心きれいに
喧ノ邪欲生して心ひきかるハ疑気たる死王ノ
慈悲王ノ物よく以之を被くたちなるハ弁才明
ハあるの心ハ明ニて我ノ男婦なる事ハ知ぬ
まつく開よ於まそて見申るハ心剛なるハ武心強
なる人の心と合十七く成ハ我ノ男心よ去るより生
我ト結え思案ニ文此条利をさけて我か

男それ我ノ心得て寸ハ大男ハ不及申たとへ小男
なるともよの死枝官を見習て親兄をたち
まつのにしくに大切に存て能え一して其人を
ゆる我ノ存し死ぬ死をなすと十人を三けて
そうへ大男十人ハ八人九人をハ吾忠をとう定し
我ニ相違なし死得得結要の事や

三ニ

人間のなきにあそて何とよ死人とえてあらと人
こ死ハ必定ゑるものや見てあとれこ死よる

七

ある喧嘩修そて

一ニ淫欲ぶかき事　　二ニ遊山見物
三ニ財寶ニ付キ　　四ニ栄花ニ付き
五ニふんこたる家作　　六ニ結構をすきる事
七ニ煩ハ不養生ニ事　　付七ツまて剣術を使ふ
付武士道を侍の志よくなれハ何程もすゝめる
稽古や子細ハ命ハ重き寶なれハ行きす
仕一方や能書ニせよしぬりのあまてもされ
るる武士しほれ死たる事もあるて稽古ハ
外になるへしはれハの前の作法をすゝめる大ゝ

古事や結戦則不死と古人も申置一命
を大切ニ存ね程ハ武略智略計策ハとふ能
知事あつまきとめて事丈して人を可見定
心易洗心結要くすや　古語曰只将一要蓄
蔵露洗出湖山浄法身

○二段目　鍛心

一人く様子をて心きさを見定る仕様とく人ニ小
刀のとさ抜とく作りきる八楊枝抹けつるて
我手深くまく抱をし全をわらかくて紀少ゐまて八行

残けれたのらぬ物や付ハ今世のためにも小身なる者
独中右するハ下の事ふ者ハ極て静なる心の人
より重能様なきの二ツハあるまし見定可申候変
早能なの人よりハ怪きやうきの二心ハあるまじと思
案文の分別して人を奇なる忠儀を頼ミ給
要ニ不存候

人間にあるべきして恐敬する事ハ道正道にして必
我より大身武士ハ小身成とも時代さ能の人
をハこそ指るさげすまじ候ことまうすまじき事

たかひなる物や事をハ山の谷より嶺をよく
みるとけらけれども山谷より谷ハ見へなからしれバ我
よりも小身ハ見へぬよし我よりも上の義を見定よし
目を細く一城をかまへて身分ハ一万事不申
にてさんまんを能して其背意小身事
よく十倍なる事相大身ハいけ城と云ひて
大信事の道理能を見れバ其谷思ひをきり
大理事に心をうけ身てしきたて住逐せぬハ
一城を身分修成かたくし付て大身ハ能背意

又小身なりし年のよりたる人も久敷す
ものは又若輩なりし年よりたりし方よ
りは見定られさゝ山の若より歳をみること
とくなり餘中大身を見定るには我か主
就はよりもむや就は其身よりの人の家中の
傍輩よくしりくし依と我か存する家中
可有之れは引合て見へし小身の年の寄
たるには我かまんくよりもあはい拙者して
若輩の人へ可有其人へとわたくしくて思

業之文の分別を定て以見るにふ乃よ述
人々て異国日身とありし唐子か右六者
ふまへ正代かうちかしてよ述もし皇以て
我よりも大身我よりも時代さ述の人をも拙治
まそし心ありし彼大身なりしこ極子ま称
これなりするを拙尸にゆるまそて大かる
ミるくりのや古人わにいとさらんや人一言を
おしてもは長短を知るに大身一城のと合
よの人福者の拙か寸人々なし呉之人を

悪口すへからす大方ハ我か親類縁者なとに
かれハ主人方とはなれ孫ハなをさら口遠て悪
物なと人ハかへる時悪口して重てかへる時なを
孫ハなをさら口遠て悪しくともハ我か子
ハ他人の事ハ人ハ見んかハ業さへすして申
なきく事をきゝつる時ハ悪口してきく
時ハはなし口てんくして悪しけれ道理となる
利して我か利はの物成の所をよく定め
人をえらみてあへしとある所ハ結要なり也

三二
人間ハなからひそ万事の中にすくれたるハ物
なり一言中に含むすへて物ともハ多く答て身
の損をまねくとこゝろえとゝろしき事也
よろ敷事なく
可相成物を能々吟味すへき
ハ事を我か作りたる能を又作りたる能を
よく作りたるを悪用しなと仕りたる有悪用となる
ためしハきよみの能をきゝても悪用ハ能を
よく人を人間ハなからひそ我か家のわさを
ぬすむハ何そし我か子すへて世を仕りとなすへし

當紀や但馬とハいふとも大藝ハたとひ悪用
よりし任物よりし之事を中絶さる人前まて不
可仕なる更人ぬわさを致さる利根ぬりのを
ほれてみんゆるりのや殊に利根ぢんとハ拙なと
之語つてさ結藝られけれのかや紀と利根識
ハゝよう紀をぢんと当世中山は寺此心ハ拙られ
まてハなすしたる人ハさういハて忠十分なすへき名
人ハ如者之難ハたりそし二かうし成たる名人ハ
成りのまてし大藝之人ハやまう津事へ其外

猿楽名人たとひさうひいて忠よくよくて難たゆう
しきていふて上手ハ如此名人ハまうさぬりの
ゑれと定るハ大藝者の心よ如まへ而まうりの
名人ハなるぬまへ而なす紀ハたれまへ往てし
上手ハ成名人まハさうぞすて是ハ自己よるま
心の容易を用られぬ時猿楽ハ未熟よなりまてハ
さうるとれ何の下手よするおとろを上つ手上古
中山と思ハ老や諸るをかへに次治之作に
道なる物中侍處への人を就つすれ我つ好

事を口にそかるのみにて信なるものをハせんさく
もなく錯乱と計思言山ともみゆる也此天地
出来て以来人而をうしなふ形様也悪心
なれハ形貌悪心明の文字とのまて露よ
つ記て思業意文の利を定て人をそう
こそやうあれハ必定かくましき記まいると者よ
ぬれぬハ形心猪無比而なる付形心よ分
て曰ク黄ハ金鑄山ス鉄崑崙是ニ又之
心ともあもとる人間のまうひをてあまんおとる

之能まとまれをハ明らとおて日百雑砕也
あるは紙きるひとは心の善語四海ノ香風自
是起ル如件

○三段目　瑩心

一 夫人ハ百六十余其心をあらひ武ハ文ハ心にきる
ひとは其こそ地正道正識疑なし然るに然
侍ハ武士道ありまれもと働大勇小勇たまし万能
は一心ふいかほとも出必定く移諸を剛強
のそあるもとたる能勇士とやて志武く盤

するゆゑこそ手柄と名にもとられて英雄の人也
此人にも強きに二ツある強一ツ剛一ツ強計に生付
人は戦の勤りもなく一足兆に強き計を守り共
其働に二ツの和ある也や一小迫合城せめ
或は大合戦などにて色めくりこそわかる也兆
智恵なくて討死してかたきの上に手柄を
さへなく臆病者にてる死軍といへるこくハ
ひ一ツ個の亦乃人合もなくおそろしき跡のつかさる
に敵大勝の強も弓鉄炮よいかけおかけられて

其とまて逃て向へつよ兆ハ必よわく成てうハ
つられつよきもの諸人に批判せらるく和一ツ生
二ツの和ハ色や一陣おくるとの大力ハなくとも
強計そうかうと生て其文やきる兆のなき者を
敵方よわく味方のもち翦捨と云あそてひ
分兆と死するもをこうたくかけてる兆
こゝ他一節まで我が門の首をもうく江ろし
て逃て向次手に弓矢よわく成もと強
のつよく一方の中まへ不当住気なりぬ

此の道理をみたる迄として強き心なからハ
正道正路の志しに落着よく識て不死さ
言說ハ言記みかく心の結要ならんや

二

人皆剛成心の生まれ付ハ至て猛らくや右
つよきハ然してよわくする和か然ハ孫れたるに
まて很者に勝利法のまてかまれハ弱き
ハ逐て悪名や強のつよきハ大勇ハすまし
き軍して負て終に世間きやくまる也
強なるハ浅きしつよき也剛の字にてつよき働ハ
奥ゆくまてつよき敵をハ剛をやぶけて
至りがかりして弱き人ハさまて人のくびを
しめることに至て柄なく終中ハ足勝利と
弱中強のつよきハ右なる剛にてつよきハ弱きる也
くろきを右を右をハ必たきまる右まて弱
かきハ升まれさるや但なく人の由れのきハきさ
いさるか孫のぼくとして人をするハつよき生まれつ
きのまれなるハ三也やうのなきてをくや
技錯る也と云ふにつよされたるれふけふ

きわまられハ又一つにぬて刀脇指弥も力と云
たのもしなる石ハくだけて後来によかつ上ハ
よく成るなすし芸ハ一とし兄につよき武士つよ
きなるたるかる兄まて後よわらく成て我をや
よるを悪しき者を出生る成人ハりつよき兄をとるハ
思ひ一所に刀脇指のきれハたのもしよたちかるゝ
とてやすらかぬを手にまかせてよこてちからや
きえのうしひろくするへならん強なるつよき
とつよ兄を以人ハそろし我よわらんとそ剛よるハ

心をらう兄なすくしておとなしき人ときて変
一 偏兄ハ色々ありとれ大勇ハ不及小勇者よと剛
強の二字をきに一旦に奥ありて生れつきて是人を
天性の成せくみにまて強につよき兄を重て生る
数によりて其智恵なくして我つよき兄を施
またよりよき兄をひきに乃て其ゝ我かこわきさき
にしてやすらかぬを云ゝ柔剛弱強もに
剛にして武勇なかしくしして敵合進
退兄ハつよきを能々わきかうく持なされ

かゝるとなりておのへの有といへとも後すハ武士の
智識まて足を武篇者と云是ハ少分の人
柔剛弱強剛なる儀を可申大分の心の調た
るハよく弓矢をとりて度々の武篇に勝利を
ゑ武術の名人なと名をよくなれ給ふさそれハ
大将の心得調へたる人ハたゝ人ハ千人の中にも
人なりてなし此人まことにいさしきめの人
の中にも大かたの人ハたんきにして多んきをめ
有や此りけくいふ人へきよくまちて人をなとく

来りと見我か武篇に成りをあらハおこなる
じゃひ用すさなかや一方にハ文武勇の人に定地
さもくして人にもとも一家それと我物とさく
さくて人をあつかひ給はす見せをしてよほし
いまゝかもきよふうさそて自前事かく色
是天道や天道ハそてるをかくなし申作
極まりと見有ハ利根利発の人とをとて下し分
色不知武勇の人の人にかくらハ足利根
發の人々申し可申候や此ち此者の乃すし早見事

一 六つと一つ宛にすへて持て生ずる也 弐ハ武芸
と位よと大勇ハ四つの位を前とす武芸
を心に足ハよりて把握する事ハ而る程をと説人
の法語を見ハ六着に語の心一つにして一心におさ
めて是をさしむるや 大勇小勇共に件の心を
以て下知をなして能之を絶えぬ所にて是に纏語
要にあや 着語 点鐵成金 点金成鉄
亦曰 運籌帷幄内 決勝千里外 以上
三 件の六着の所々程をよく捨て一人の一心に

持思案之文の前ハまりて志川にかんして其心
まて静なるしる早く見えて其心是早
把をなる相亦静なりしくしやきしるをとて
見えて心静なるしるとめけ重把握を起さ
くさ外内不同なるも相文強き剛きの二つの
内いすれも中ほとよく把心は生れし勢ひ頃ます人
下手を心得て是ぞ悟りて事とへし加まる頂と
よ強の字のつよ把握ちらく生れ勢の人剛
の字のつよみよりおのれをとなする所に之ん

よくしんと申て人の物をかすめてとるを云経
恵ねハいかほとほとこしてと云事すれとも誠ハ
きるをたのミて非欲なるこゝろ地あれともむさほる
すこすをハ不仕偽をほとこすと云も利根にて利
發にあれハ利口なるよく諂を明てものを云
人を持て利口者を可申やうくいハ者なれそ
やふれ重犯も怪きも祢く手をほとくき色け
大切の心の様子ハ唯心偽ニ静なる心にかゝると云
是可解て能中不能静なる心よりてハ必定卑き

成重犯も怒怪犯を成祢く犯も怒偽
きをなす芸ほとけ不可の心くるを静なる
者ハ心ハ金剛心を強き剛ニけ内よりすれ
柔も弱き甚てんなんちさいなきけ人く
観念ハ上透霄漢下徹黄泉仁ハ大通
大徹く人にて發明れ仁にてたとへハよのこゝか
きつゝくんりんと地しも萬事純なる理にあらら
なるを大勇ハ名人大将小勇ハ名人と相定ニ付
小勇成者にめしけの人ゝを名大将ハ見へ乎

給ふ大方ハ大将ハ右の人を名乗り給ひまして
下々の者たちハ名乗りもなくして但乱人武士
まぎれの時ハ法名を名乗る事也源義経公の
しけるところ西塔弁慶ハ勧進帳をよミ
佐藤忠信ハ吉野山の計策ニ敵方へよりそ
ひ利口の正儀にて義経を落し申候伊勢三
郎ハ計策ニ木曽入道馬川の中間ニ寄
添ひ追手へ討手の虚実を定めて義経利
口の智謀正儀のため義経公よく加へ

の者を名乗り給ふ加様の義経公も畢竟
まれハ伊豫守篇國の御下頭にて相果候
やさしきといひても剛強の名将の御名ハ畢に
さくかるとは猶又尊氏公の侍大将武蔵守
師直兼好法師の名人を頼みしてより
たまする名をかりしなも文いひつかハすなれ共
さすかの賢人何とて師直ニ頼まれしや
此判官内方を師直執心の文とハ書たる
それとえぬにたとへて申ハ趙州和尚として大

若有識老僧若地獄ニ不入ハ何とてさい
ろう中をすくいたまハんと彼ノ禅宗ヘ立入地獄
の話を説しハ可ならハ兼好ハ慈悲の心にて
ましませしの師匠ハきゝのかるゝ心をも不改
天下の仕置仕人ニもあんしくよ死みちに引
入らんとけちらんちひの心にてこそあるら
め師匠西通成ましく死と見て兼好法
行仕ハ此兼好右とく心をもつて了剤乃
儀をましてこの仕置し利殺名誉不

ハ及師匠心きらくなすられハ兼好をつかハさるら
さるつのまひらし　深く傷ミまんて此本を見
て人とまなひ了見経のよれにいさんを得へし
大方ハ内の人とを可ス之金剛心数明大徹と
仁見知諸要の所也
右金剛心大道大徹ハ仁ハ雅性一文ノつよ死乱大
方ハつよん死あらし　小方ハ辛ん遠し　是偏ニ
人ニ負るとかるき批をなし帰て如此

早稲田大学図書館
011888006593